

稲 山 会

通 信

第36号

2018年1月1日発行

発行人：斉藤雄二 発行所：稲門山の会事務局 TEL 03-3367-3723 FAX 03-3367-8150 ©稲門山の会1998

2018年の新しい年を迎えるにあたり、稲門山の会の皆様にご挨拶申し上げます。

2017年度の現役の夏山合宿・山行は台風の影響もあり実施が出来ない山行もありましたが、計画・実施山行は次の通りでした。

- *プレ夏山合宿：南ア北沢峠～仙丈ヶ岳 8月7日～8日（台風のため中止）
- *夏山合宿：北ア八方尾根～唐松岳～五竜岳 8月13日～14日
- *夏山合宿：北ア北鎌沢～北鎌尾根～槍ヶ岳 8月24日～28日
- *夏山合宿：北ア燕岳～大天井岳～常念岳～蝶ヶ岳 8月31日～9月3日
- *夏山山行：南ア北岳バットレス第四尾根 9月30日～10月1日
- *10月山行：南ア鳳凰三山 10月14日～15日（台風のため中止）

さて、この度新しい会員名簿をお届けすることになりました。前回皆様に稲門山の会の会員名簿をお届けしたのは2010年でした。名簿発行は一応5年に一度位との目安でしたが、新OB・OGの加入も少数であり、また個人情報の取扱い等もありましたので発行が遅れておりましたが、今回お送り致します。

稲門山の会の会員諸兄姉との「きずな・つながり」は、新年に大隈会館で開催します新年会・総会、年2回発行のOB・OG会誌「稲山会通信」、年2回の現役との合同ハイキング、5年毎に発行します会員名簿、それに山の会ホームページも加わりますが、これらを大切に守ってゆきたいと考えております。

現在、稲門山の会の会員総数は342名で、住所が把握でき連絡が取れている会員が236名、鬼籍に入られた会員が42名、住所等の連絡先不明者64名です。

昭和39年卒業から50年代前半迄の卒業のOB・OGは比較のお元気の方も多く、人数も多いのですが、その後は現役時代から学生数が少数でしたから、OB・OG数もそれなりに減少しています。これからの稲門山の会は、昭和40年代後半から50年代卒業のOB・OGの活躍とサポートを大いに期待したいところです。

1月27日（土）に新年会・総会を大隈会館で開催致しますので、卒業同期および卒業の近いOB・OG同士では是非ともお声を掛け合って、ご出席して戴きたくお願い申し上げます。

2018年1月

稲門山の会代表 井村英明

新年会・総会のご案内

今年も稲門山の会の新年会・総会が近づいてまいりました。現役山の会の会員も多数参加されます。同期および卒年の近いご友人をお誘いの上是非ご参加いただき、交友を深めると共に、現役会員から若いエネルギーを貰ってください。本年も上田前代表の「山の神への御祈祷」を予定していますので、皆様も御祈祷にご参加ください。

日 時：2018年1月27日（土）午後3時から

場 所：早稲田大学大隅会館 301～303 号室

会 費：6,000 円（別途年会費 4,000 円）

稲門山の会役員会



春のハイキング（石老山）のご案内

2018年春のハイキングは関東百名山の一つ、相模湖南岸の石老山で実施します。奇岩を見ながら登り、山頂では丹沢主脈、富士山の展望も楽しめる手軽で人気のあるハイキングコースです。現役の新入歓迎も兼ねて、OB・学生ともども楽しく一緒に歩きましょう。下山後は「さがみ湖温泉うるり」でひと風呂浴びての懇親会も計画しています。皆様是非お誘い合わせのうえご参加下さい。

日 時：2018年4月8日（日） 9:35 集合

集合場所：JR 中央線 相模湖駅前 神奈中バス停（9:45 発 三ヶ木行き）

行 程：相模湖駅＝石老山入口バス停～石老山登山口～顕鏡寺～融合見晴～石老山山頂
～大明神展望台～プレジャーフォレスト前バス停（さがみ湖温泉うるり）
＝相模湖駅 （コースタイム 2時間55分）

幹 事：新井昭夫（S46年卒） araia@nifty.com 080-1161-5306

松村幹雄（S48年卒） mykof04@s5.dion.ne.jp 080-5175-9695

※参加ご希望の方は4月2日迄に上記幹事宛にご連絡下さい。

OB 山行（1） OB 有志夏山山行－笠ヶ岳・聖なる岳の記憶－

金子治雄（S41 年卒）

齢を重ねると山行は荷の軽いピストン登山が主となるが、1日の行程を軽くすれば、昔のように縦走登山も可能になるのではと考え、15年の白馬三山（3泊4日）、16年の鏡平～双六～黒部五郎～太郎平（前夜発4泊5日）に引き続いて、17年もまたOB有志による夏山山行を行った。

メンバーは都合で入山が遅れる島田OBを加え、77歳の吉田



抜戸岳より笠ヶ岳を望む

（佐久間撮影）

OBから68歳の後藤OBまで、幅広い世代の7人が揃った。参加メンバーは、それぞれ日常のトレーニングの他、事前に2～3回の山行を行い長丁場の山行に対して万全の態勢で臨んだ。

参加者：L金子(S41)、SL新井(S46)、吉田(S38)、太郎良(S43)、佐久間(S43)、

後藤(S49)各OB 後発参加の島田(S46)OBは台風襲来のため入山を断念した。

当初行程：8月3日 夜行バス

8月4日 新穂高温泉～鏡平山荘

8月5日 鏡平～弓折岳～抜戸岳～笠ヶ岳（笠ヶ岳山荘）

8月6日 笠ヶ岳山荘～抜戸岳～弓折岳～双六小屋

8月7日 双六小屋～三俣蓮華山荘～黒部源流～雲ノ平山荘

8月8日 雲ノ平～水晶小屋～野口五郎岳～烏帽子小屋

8月9日 烏帽子小屋～高瀬ダム＝大町温泉郷

8月10日 帰京

出発直前になり長い間迷走を続けていた台風5号が本土を窺う体制となり、入山後は進路を東に向け8月7、8日に北ア直撃が確実になってしまった。このため後発の島田OBに入山を取りやめて貰い、6日に予定しなかった笠新道から急遽下山、平湯に宿泊し7日に帰京した。結果、参加者全員張り切っていたものの、笠ヶ岳を登頂しただけで雲ノ平に行けず、当初予定の半分に終わってしまった山行だったが、笠ヶ岳の素晴らしさを背景に、メンバーの足と息と心が合って、私にとって生涯忘れられない山行となった。

笠ヶ岳は、穂高や槍と違って、飛騨の麓から良く見える山で、山は巨大だが、麓の高原川沿いの村からアプローチが長くないため、古くから信仰登山として登られていた。初めに文永年間（1264-75）高原郷の本覚寺の僧道泉、元禄年間（1688-1704）に遊行僧円空、天明2年（1782）僧南裔によって登られてきた。その40年後の文政6年（1823）に、播隆上人が笠ヶ岳再興を願い、麓の7ヶ村の

名主の協力を得て、50日を要し笠谷に道を切り開き2度頂上を極めた。翌年更に麓の村人66人を伴って3度目の登山を行い、笠谷の登山道に一里毎に石仏を設置、頂上には小さな仏像を奉納した。

播隆上人は2度目に登った時、村人たちとピークでブロックン現象に遭遇、阿弥陀如来を感得し、その時初めて、雲海の上にくっきりと屹立する槍ヶ岳を望み、その開山を決意した。そして松本平の小倉村の名主たちと共に、彼らの費用で切り開いたばかりの小倉村・蝶ヶ岳・上高地に至る飛騨新道を経由し、槍沢から槍ヶ岳に登頂したのである。

近代登山における笠ヶ岳の登頂は、明治27年6月ウェストンによって穴毛谷から行われた。その後大正3年に小島鳥水は、飛騨の地元の学校の先生たちと探検を兼ねた大掛かりな登山隊を組織し、双六谷を遡行し、双六岳から抜戸岳を経由し笠ヶ岳に登頂、穴毛谷を下った（山崎安治 日本登山史参照）。

過去の笠ヶ岳周辺における山の会の積雪期の記録は希少であるが、その中でもCL奥野、L芳賀OBたちが行った1968年の春山会山行は特筆すべき山行であった。当時積雪期数登に過ぎなかった抜戸岳南尾根から槍ヶ岳まで縦走し、中崎尾根からのサポート隊と合流し奥穂高までの計画だったが、中崎尾根隊の西鎌尾根事故によって北穂アタック未遂に終わった。しかしこの2年前に行った燕～槍の冬山縦走と共に、山の会でもこの山行以降積雪期には、北アの稜線縦走が普通に行われるようになった。この後1977年の2月の村田OB、同年3月亀田OBの笠ヶ岳の記録が残っている。



槍穂を背景に大ノマ乗越にて

さて今回の山行でも、昨年登った小池新道は整備が行き届いているため大したストレスも感じることなく、無事鏡平山荘に到着した。翌朝台風が四国に上陸直前だったが、心配だった天候も槍穂が見えたので一安心、早出して笠に向かったが、大ノマ乗越では槍穂の全貌が細部まで見え一同その素晴らしさに思わず歓声をあげた。大ノマ岳から笠の稜線は、今までと打って変わって登山者は少なくなり静かな稜線歩きとなった。



秩父平手前から抜戸岳、笠ヶ岳

て悟ったのである。しかし後に、この岳の大きさに苦しめられる結果となった。秩父沢の雪渓を詰め、稜線に上がってからは、楽勝ムードだったが、そこからいつまで歩いても小屋に着かず、高低差の少ないならかな稜線を辿れば、短時間で小屋に着くという希望は見事に打ち砕かれてしまった

この日、今回の山行で忘れられない光景と出会った。それは秩父平の手前から望んだ笠ヶ岳の巨大な山容を見て、笠ヶ岳は、笠のピークだけを指すのではなく秩父岩、抜戸岳を含めた概念であることを初めて



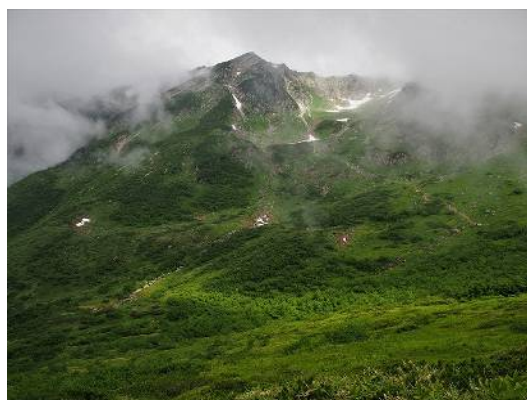
笠ヶ岳山頂にて、60周年記念Tシャツを着て

のである。ようやく笠の小屋に到着し、ビールを我慢してガスの中、笠のピークを踏んだ。感動のピークだった。

夕食前、今後の予定の作戦会議を開き、明後日台風直撃が現実になったことから、張り切っていた島田 OB には誠に申し訳ないが入山を取りやめて貰い、急遽、笠新道から下山することに決定した。



槍穂を遠望に笠新道を下る



笠新道杓子平から穴毛谷源頭を望む

ということで、2018 年もまた鏡平から雲ノ平へ OB 有志夏山山行を実施いたしますので、同行したいと思う会員の方々、ぜひご参加ください。

今回の山行の気分について、太郎良 OB の寄せてくれた詩が、余すことなく伝えている。詩の中には昔、共に登った今は亡き姫野、横瀬両兄の懐かしい姿も登場している。彼らも一緒だったのであろう。

青春登山＜笠ヶ岳の思い出＞

太郎良 博

夏山に朝露すがし金色の輝き満つるキンポウゲの花
人けなき高嶺の道のそこそこに小さく寡黙に黒百合の咲く
くうくうと含み鳴きたる雷鳥の声這松のしげみに聞こゆ

(弓折岳)

(大ノマ)



無事下山、笠新道登山口にて

七十七歳筆頭に吾らが山登り軍団一列縦隊肅々歩む
 岩尾根をしつかと踏みしめ辿りゆく我らが編隊（パーティ）若し若し
 素麺を食いてこの原に憩いしも若かりし日の夏の思い出（秩父平）
 若き日の笠ヶ岳（かさ）の山旅偲びつつ今にし歩むこれが終（つひ）かと
 岩尾根を息つぎひたすら登りきて頂に立つ果ては千仞
 頂に坐します仏貴（たふと）かる額づき拝む上人のみ跡
 笠谷を遡りきて頂に上人・里人弥陀にまう遭ふ
 今日この日この頂に立ちたるも六度（むたび）なるかなとほき青春
 重き荷にこの頂を越えしこと友すでになく遥かすぎこし（横瀬君、姫野さん）
 「下山しよう」リーダーの重き一言に一同異見なし一本の絆
 ひたすらに胸つく坂を絶え絶えに登る少年の無垢の眼差（笠新道）
 仰ぎ見ゆ大圏谷にそそり立つま白き巖映ゆる這松（杓子平）
 山旅のひとつ終はりて憩ふとき遙けく思えばそぞろかなしも
 人生の旬の只中に吾のあり七十路仲間笠ヶ岳（かさ）の山旅

山行中出会った花々



オオカメオオキ 蒲田川左保



ハクサンアザミ 小池新道



コイワカガミ 弓折乗越



ミヤマリンドウ 弓折岳



ミヤマキンポウゲ 弓折岳



クロユリ 大ノマ岳



タテヤマリンドウ 大ノマ岳



チシマキョウ 抜戸岳



シナノキンバイ 杓子平



チングルマ 杓子平



ハクサンイチゲ 杓子平



ハクサンフウロ 笠新道



シモツソウ 笠新道



シナノオトギリ 笠新道



ササユリ 笠新道



ニッコウキスゲ 笠新道

(新井・後藤撮影)

OB 山行（2） 穂高岳山行

吉田 稔（S38 年卒）

日 程：2017 年 9 月 17－21 日

参加者：吉田稔(S38)、新井昭夫(S46)、および千露里庵倶楽部の立田好夫氏、森村実氏、大塚栄治氏

9 月 17 日

台風 18 号の接近で表銀をあきらめコースを変更。立田車でチロリアンへ、台風は日本海へ抜けて北上。薪を投げ入れ水をかぶせ、熱した体にシャワーを浴びて 2 度 3 度サウナで毒気を抜き、酒とおでんを堪能。

9 月 18 日

松本から沢渡でパーキング、タクシーで上高地。雨模様の上高地を 10:30、雨支度を「さてどうしたものやら」と思案しながら、明神、徳澤、横尾山荘着 13:30。山小屋もホテルなみにここまで整備されたかと良し悪しの思案にとらわれる。風呂に入りビールとワインでのんびりと夕食を待つ。どうやら天気も回復したようだ。

9 月 19 日

6:30 横尾山荘発 半世紀前に通いなれた山道を涸沢へ。9:30 上の方の涸沢小屋着、後発の大塚君は昼頃には登ってくるだろう。10:30 ザックをおいて北穂ピストン、何年か前の 5 月、残雪の登行と比べるとキツイ。足がつりそうでやばい。13:15 北穂小屋でもうどうにでもなれとビールに身を委ねる。



涸沢に到着



槍ヶ岳を背景に北穂高岳山頂

当初目指した大キレットの彼方に槍がすっきり。この年齢であの長時間の馬の背をこなせるだろうかと自分に問いかける。天気さえよければ挑戦していたはずなのに。16:00 涸沢小屋大塚君の出迎え。寝付かれず反転、反転。



北穂高岳山頂から槍ヶ岳を望む

9月20日

4:30に起床立田君の用意した朝飯で腹ごしらえ。5:30奥穂へ向かう、ザイテングラードを経て奥穂山荘 7:56着。9:10奥穂山頂、強風と寒気強まる、ウインドヤッケの下に薄いダウンを仕込む。雪にでもなれば山荘に戻るしかない。頂上直下東側に避難場所と思われる一角が整理されている。動きの取れなくなったパーティーの為に、テントも幾張りか可能だ。視界は良好、ジャンダルムも西穂もくっきりと姿を見せる。



ザイテングラード登りで小休止



奥穂高岳山頂にて

る予定が満杯で断られ、仕方なく更に2時間歩かされて16:00上高地。体のどこにも支障はなく無事敢闘出来た。これもパートナー諸君の暖かい見守りがあったればこそ。

11:02 鎖と梯子の連続する吊尾根を強風にあおられながら紀美子平の前穂への分岐点。さすがに前穂ピークへ登る気はしない。重太郎新道をおとなしく降りよう。77.9歳の老齢では登りも降りも45分のピッチが精一杯。降りは更に足元が覚束なくなり、浮石にでも乗れば一巻の終わり、パートナーの絶えざる見守りが不可欠です。諸君に感謝！14:00 岳沢ヒュッテ、泊ま

今年は7月の南アルプス北岳 3,192m、8月北アルプス笠が岳 2,897m、今回の北穂 3,106m、奥穂 3,190mと山行きにとりつかれた。来年は雲ノ平と大キレットが待っている。おかげで北野プロにゴルフが下手になったなと小言を頂戴する始末。

現役夏合宿（１） 唐松岳～五竜岳縦走

厚木紗里（文学部３年）

日 程：８月１３日 八方尾根～唐松岳～五竜山荘

８月１４日 五竜山荘～五竜岳～遠見尾根

参加者：厚木紗里（L3年）小澤亮（SL3年）佐藤将敬（1年）

８月１３日（１日目）

七時過ぎ、八方池山荘を出発。どんよりとした曇り空に、小澤が「歩いている最中は曇りでいいけれど、せめて山頂にいる時だけでも晴れてほしいな」とぼやいた。佐藤と私は、そんな都合良く晴れてくれたらどれほど嬉しいか、と笑った。

この合宿が行われる数日前、「富士山に１日２回登る男」の特集が放映されていた。その中で、休むことなく、ゆっくり歩き続けることが疲れない登り方である、と紹介されていた。奇遇にも、３人ともその番組を見ていたため、この機会にその登り方を試してみよう、という話になった。座る場所は湿っていた上、いつ雨が降り始めるかわからない天気だったため、実践するには丁度良かったのである。水分補給の瞬間以外は一切立ち止まらず、ゆっくりと登り続けた結果、唐松岳頂上山荘に２時間半で着いた。コースタイムを大幅に巻くことができたこともさることながら、自分達が全く疲れを感じていないことにも驚いた。この登り方を今後の山行に取り入れるべきである、と３人の意見が一致した。

唐松岳山頂に着く頃には、なんと晴れ間が広がっていた。周りの山々には雲がへばりついていたので、その姿を見ることはできなかったが、私は唐松岳で太陽を拝みただけでも大満足だった。なぜなら、私は高校時代に二度唐松五竜縦走に挑戦したのだが、どちらも雨だったからである。３度目の正直となったため、感動も一入だった。



牛首の鎖場を慎重に通過

８月１４日（２日目）

テントを出ると、深い霧が出ていた。ここまで深い霧だと、朝日を望めないどころか、暗いうちに歩くのも危ないと判断し、ゆっくり朝食をとることにした。

４時半を過ぎ、ようやく明るくなり始めたため出発した。すると、それまでの霧が嘘のように晴れ始め、山頂への道中の開けた場所で、雲海から顔を出す朝日を拝むことができた。私達３人も、周りの登山者も、疲れを忘れて眼前の美しい光景に釘付けとなった。



唐松岳の登り、コマクサが咲いていた



唐松岳山頂にて全員集合

その日は五竜山荘まで行く予定だったため、早めに山頂を後にする。牛首の鎖場を通過し、再びガスに包まれながら稜線を２時間ほど歩き、五竜山荘に到着した。小屋で買ったジュースを飲みながらくつろいでいるうちに、続々と登山者が増え、１５時を過ぎた頃にはテント場はほぼ満員状態となった。



五竜岳ご来光

朝日に照らされて真っ赤に染まった岩々を踏み越えて、五竜岳山頂に到達した。朝の澄んだ空気を肌で感じながら山頂からの絶景を眺める時間の、なんと贅沢なことだろうか。その有り難みを存分にかみしめてから、山頂を後にした。するとわずか数分後、なんと再びガスが出始めたのである。前日の小澤の「山頂にいる時だけでも晴れてほしい」という言葉が本当に実現したようだった。今後とも、小澤には言霊の力で山の会の合宿に晴れをもたらしてほしいものである。

山頂では晴れ、雨には降られず、今回の山行は本当にラッキーだった、と口々に言い合いながら、大興奮で遠見尾根を下っていった。そのためか、アルプス平に9時半に着くことができた。ご褒美に佐藤が太鼓判を押すアイスクリームを食べ、テレキャビンで下った。

現役夏合宿（2） 槍ヶ岳北鎌尾根縦走

真藤幸輝（創造理工4年）

日 程：8月24日～28日 北鎌尾根縦走

参加者：真藤幸輝（L4年）井上直斗（SL3年）利藤暢（3年）

8月25日（1日目）

24日は松本駅にて前泊。上高地から槍沢を通過し、水俣乗越を越えて天井沢を下り、北鎌沢出合にて幕営。大雨の中で長時間の行程だったので今回の山行で最もつらい一日だった。

8月26日（2日目）

朝8時頃まで雨が降っていたため、遅い出発になった。北鎌沢をつめ、独標を巻いて稜線上を歩いた。この日のうちに山頂まで到達できそうになかったため、安定した場所でビバーク。水が取れないため、夕飯は最小限の行動食のみだった。



独標のトラバース



稜線での快適なビバーク



稜線にて



槍の穂先の登り



槍ヶ岳山頂にて

徳沢で幕営し、翌日上高地から帰京した。

8月27日（3日目）

朝も最低限の行動食を食べて出発。大槍の登りは難しくはないが、岩が脆く緊張感があつた。山頂に抜けるとほっとした。井上・利藤が足の痛みを訴えていたため、槍沢から上高地に下山することにした。終バスの時間に間に合わないため

夏山合宿（3） 燕岳～常念岳～蝶ヶ岳縦走

目次浩之（政治経済学部3年）

日程：8月31日～9月3日

参加者：目次浩之（L3年）小澤亮（SL3年）、佐藤将敬（1年）齋藤拓海（1年）

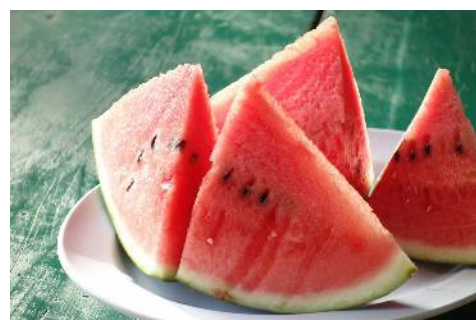
入山前は雨予報が出ていたため、上高地まで到達できるか不安であったが杞憂に終わった。天気にも恵まれた4日間となり、2人の1年生も十分に北アルプスを楽しんだ。

8月31日（1日目）

穂高駅に集合。今回のパーティーは3年生の小澤と目次、1年生の佐藤と齋藤である。バスで中房温泉まで登り、その日はここでテントを張る。地元の小学生が行事で燕岳に登っていたらしく、続々とちびっこ達の中房温泉に降りてきた。テント場は温泉の地熱のおかげでシュラフが必要ないほど暖かかった。

9月1日（2日目）

この日は大天荘まで9時間の長時間山行。4時前には中房温泉を出発、暗闇の中、急登で有名な合戦尾根をひたすら登る。7時過ぎには燕山荘に到着。空荷で燕岳をピストン。この日は雨こそ降らなかったものの、ガスっており眺望は望めなかった。燕岳～大天荘までの道のりは小さなアップダウンの繰り返し。目次少しバテる。みんな待ってくれる。優しい。昼前には目的地着。とてもきれいな山小屋で、トイレの嫌な臭いが全くしない。皆感動。



合戦小屋のスイカ、登ってきて良かった！

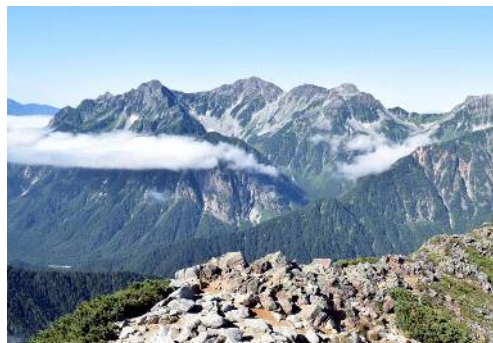
9月2日（3日目）

この日も7時間越えの長時間山行のため、5時前には出発。星がきれいなのでしばし撮影タイムを設ける。常念小屋までの道は槍、穂高方面への眺望がよくとても気持ちがよい。朝日と雲海に心を打たれ、疲れも吹き飛ばす。小屋から眺める常念岳は険しく、山頂につながる急登が見えるのが、むしろ



常念小屋からの眺望、天気にも恵まれた

つらい。気合を入 大天井～常念、朝日を浴びると元気が出る。なおして、ゆっくりと高度を上げていく。コースタイムよりも早く常念岳に到着。眺望がすばらしい。山頂で蝶ヶ岳方面に目をやると、谷筋から沸き立つ雲が尾根に覆いかぶさっていた。ここからの道が案外きつい。常念の急な下りはもちろんのこと、蝶ヶ岳の樹林帯は眺望がなく、アップダウンが激しい。12時過ぎには蝶ヶ岳ヒュッテに到着。雨予報が出ていたので皆で相談し、急遽小屋泊に変更。快適な時間を過ごす。



常念～蝶の稜線から穂高岳を望む

9月3日（4日目）

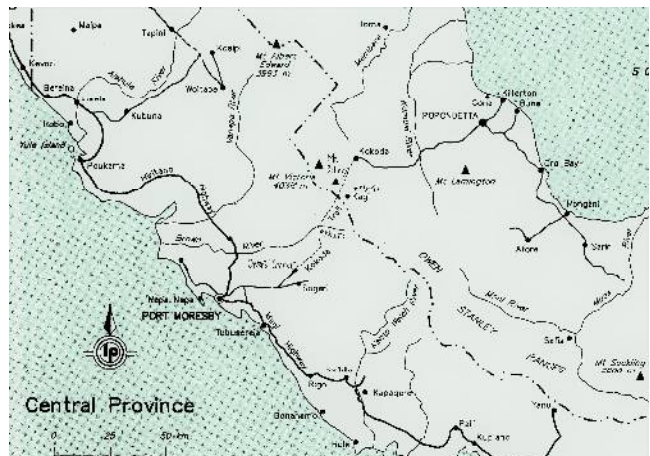
この日は下山日のため、6時過ぎに出発。徳沢への下山道はただひたすら急なくだり坂。滑らないように気を付ける。10時過ぎには上高地に到着、ここで解散。

投稿：パプアニューギニア・ココダトレイル踏破 ー戦時中の日本軍の山越えルートをたどるー

倉川秀明（S51 年卒）

私は 1990 年から 1992 年にかけて 2 年間、仕事でパプアニューギニアに滞在したことがある。仕事は、ソグリ国立高校で日本語を教えるというものである。滞在中、休暇を利用して各地を旅行したが、登山に関してはパプアニューギニアの最高峰ウィルヘルム山 Mt.Wilhelm 4,509m とユール山 Mt.Yule 3,227m に登頂し、第 2 次世界大戦中に日本軍が山中を行軍したルートであるココダトレイル Kokoda Trail を踏破した。ここでは、ちょっと変わった体験としてココダトレイル踏破について紹介したい。従って、技術的に高度な登山ということではないということを予めご理解いただきたい。

ココダトレイルとは、第 2 次世界大戦中に、日本軍が南太平洋上の重要拠点であるニューギニア島南岸のポートモレスビー（現在のパプアニューギニアの首都）を攻略すべく、北海岸から山越えをして進軍したルートである。結果的に日本軍はポートモレスビーを目前にして連合軍に大敗を喫し、それ以後敗戦の日まで軍隊の体をなさない状態で、ひたすらニューギニア島の中を敗走するきつかけとなった戦闘の道である。この戦闘で投入された日本軍 11,400 人のうち約 8,000 人が戦死したとされる。



ココダトレイルの地図

日本軍は、1942 年 7 月 21 日に北海岸のゴナに上陸し、ココダという集落を通り、ニューギニア島東南部の中央を背骨のように走るオーウェン・スタンレー山脈（最高峰ビクトリア山 4,038m）の中のベラミー山 Mt.Bellamy 2,382m の山頂を超えて進軍したが、ポートモレスビーを間近にして 9 月 25 日に退却を開始したのだった。なお、東西ニューギニア戦線全体に投入された日本兵は約 20 万人、そのうち日本に生還したのは約 2 万人で、その死者の多くは戦闘による死ではなく、病気と飢餓であったという。

私は、自分の勤務する学校が南海岸近くの山中の村ソグリにあり、第 2 次世界大戦時には連合軍の最前線の野戦病院があった所だということから、日本軍が進撃した北から南への道を、逆に南から北上する道程を辿った。ソグリ高校は全寮制で、全国から選抜された生徒が集まっているので、その生徒で山地出身の 6 名を選んで連れて行くこととした。



同行した 6 人の高校生

1990 年 9 月 29 日早朝に我が家（高校の敷地内の教師用宿舎）を車で出発して、約 40 分で連合軍の最初の軍事拠点であったオウワーズ・コーナーに到着し、そこからいよいよ徒歩の行程が始まる。谷川へ一気に降りて、川を渡渉して急峻な崖を登りきると、イミタリッジという崖の上に出る。そこは日本軍の最終到達地点で、到着した夜にそこからポートモレスビーの町の灯りが見えたという。



沢を渡る

私たちは細い道を行くが、生徒たちは履いてきた靴を脱いで、早くも裸足で歩いている。山地出身の生徒だけあって逞しい足をしている。今日の宿泊予定地はナオロという村だが、踏み跡程度の細い道を辿り、小さな頂をいくつ超えてもたどり着かず、途中の道で野営することとする。

翌 30 日（2 日目）、歩き出して 1 時間半でナオロに着く。わずか 5 軒の小さな集落だが、村人が出てきて、水、ヤム芋、焼きバナナなどを持ってきてく

れて歓待してくれた。最近村の子が山中で人骨を見つけたそうで、戦時中の兵士のものだろうという。

ナオロを出ていくつもの沢を渡り、一つ尾根を越えるとマナリ村。20 戸ほどの家があった。再び長い尾根をたどり、暗くなる頃エフォギ 1 という村に着く。ココダトレイルの中で一番大きな集落で、無線も病院もあって、私たちは病院の一室に泊めてもらった。ここでもトウモロコシ、サツマイモをもらう。月明かりの美しい晩だった。

10 月 1 日（3 日目）エフォギ 1 から一つ尾根を越えると、エフォギ 2 の村がある。ここには大きな日本兵の慰霊碑があった。一度谷を渡って尾根を登るとカギという村があり、ある老人に会った。



ナオロ村からペラミー山を望む

彼は戦時中のことをよく覚えていて、当時日本軍がこの飛



ナオロ村への道

行場をもっと大きくして使っていたこと、この上空で日豪の空中戦があったこと、ここ一帯で日本兵が 35 人死んだことを語ってくれた。

カギを過ぎてココダトレイル最高地点のペラミー山へ至る最もきつい登りにかかる。2 時間半登って峠ギャップ The Gap に着くが、ここから道に

迷ってしまい、焼き畑に出た。その脇に屋根と骨組みだけの作業小屋があり、雨も降り出したので、今夜はここに泊まることにする。

10 月 2 日（4 日目）早朝に出会った村人の案内で踏み跡を辿って直接尾根を越えて昨日通ったカギ、ギャップまで同じ道に戻る。地図を調べ直して地図の方が正確ではない事を確認して、地図に頼らずにルートファインディングに徹すると、ペラミー山の分岐点を発見した。しかし、今日は山越えをする時間がないので、尾根の東側へ下り、ミオラという村へ行って泊まることにした。

ミオラは標高約 2,000m、盆地の中に広大な湿地が広がっていて、周囲は深い霧に包まれている。



ミオラ湿原の中に砲弾が置かれている

湿原にはウスユキソウやチングルマに似ている花が咲いていて、まるで日本の北アルプスの草原を歩いているような錯覚に陥った。途中の道端には大砲の弾が7個並べてあり、この湿原の中でも激しい戦闘があったことが窺える。湿原をほぼ横断して一番奥にミオラ村があり、草葺きの小屋に泊まる。小屋の中には、日本軍の砲弾（昭十七と書いてある）、日豪両方のヘルメット2個ずつ、機関銃の大きな弾が無造作に置いてあった。この夜はひどく冷え込み、皆寒くて寝られなかったようだ。

10月3日（5日目）ミオラを出てギャップまで引き返し、いよいよベラミー山を越える時が来た。2時間かけて尾根を登ると、見晴らしのきくココダ峠見晴台 The Kokoda Gap Lookoutに出た。標高約2,200m。地図ではここからさらに頂上へ登りが続くが、実際には直接山腹を横切り、沢まで下ってしまった。日本軍は当時頂上に登り、万歳を唱えたのはいいが、頂上から南海岸線が見えると思っていたのに、「そこから見たものは、なおまだ無限に続く山々であった」^{注)}という。当時の日本軍司令部が地理を全く把握していないで闇雲に横断計画を立てたという無謀さがよくわかる。

^{注)} 御田重宝「東部ニューギニア戦、進攻編」講談社1988年。



ベラミー山からココダ方面を望む

だらだらした尾根を上り下りしたあと、沢伝いの道に出てしばらく行くと、アロラ集落に着く。途中の道には砲弾と手りゅう弾が置かれており、銃弾の薬きょうも拾った。「1941.MG」と書かれており、オーストラリア軍のものであろう。村に着くと、村人が次々にやって来ては、ミカン、バナナ、タロ芋、カウカウの煮物、キュウリなどをどっさりくれた。村人の親切さに頭が下がる。

10月4日（6日目）歩き始めて2時間でイスラヴァ村に着く。イスラヴァは日本軍が山に入ってから初めての大きな戦闘があった所である。6日間オーストラリア軍との攻防戦が続き、最前線にいた高知144隊1個中隊約180人が60人ほどになったという。

私たちは、休まずひたすら歩き、午後1時過ぎにやっとココダ村に着く。通りがかった村人が、スイカをくれた。この時のスイカの甘かったこと、皆むさぼり食った。ココダはココダトレイルというこの道の名前がついた起点の村である。ここで、一応この山行は終了したこととなる。ここからは、車道があり、通りがかったトラックに載せてもらって、北岸の大きな町ポポンデッタまで行くことができた。

途中両岸の間が60～70mで川幅30mぐらいの急流クムシ河を渡ったが、戦争当時南海支隊がココダから退却する時に、すでにこの川の橋が連合軍に占領されていて通れずに、下流を大きく迂回して渡渉したところである。川は雨で増水し、渡河点が見つからずに湿地の中を腰までつかって歩くこと10日間、多くの兵士が病気と飢えで死んだり、急流に飲まれて溺死したという。この作戦の指揮官である南海支隊長堀井富太郎少将は参謀らといかだで川を下り、河口に到着。海岸伝いにギルワという日本軍の拠点へ行く途中に突風で沈没し死亡した。「クムシ河、死の渡河」と呼ばれている。この時点から日本軍の部隊は解体し、兵士はバラバラになって、ジャングルの中を海岸のゴナという日本軍陣地を目指す、やっとたどり着いたゴナではその後軍隊が全滅する。

戦争当時の日本軍の有様を各地で目に浮かべながら、この山旅を終えた。

秋のハイキング（奥多摩・浅間嶺）

松村幹雄（S48 年卒）

今年の秋のハイキングは10月8日(日)に、4月に雨天中止した奥多摩の浅間嶺で行いました。秋晴れで気持ちの高まる中、武蔵五日市駅前のバス停に集合した参加者は、最高齢の78歳の2名を含めOB10名と学生3名でした。たまたまこの日は、五日市をスタート・ゴール地点とする山岳耐久レース「ハセツネ2017」の日で駅前には関係者も見えました。9時発の数馬行きのバスは



出発前の全員集合

2台増発でした。浅間尾根登山口で下車、ラジオ体操で体をほぐし歩き始めました。最初の登りが終わると、なだらかな尾根歩きです。ここが古より甲州との交易路であったことが頷けます。先頭の金子OBのゆったりとした絶妙のペースのお陰で息も切れず、OBも現役も話が弾みます。

お腹が空いた頃に浅間嶺展望台に着きました。少し曇ってきましたが、御前山等奥多摩の稜線を見ながら、ベンチでのんびり歓談しながら昼食です。払沢の滝入口バス停に下山したのは3時前、タイミングよくバスに乗り武蔵五日市駅に戻りました。立川駅前の居酒屋で恒例のOB・現役合同の懇親会でまた話が弾み、楽しい1日を過ごしました。



山頂にて全員集合写真

参加者

OB: 吉田 (S38)、松村(啓) (S38)、笠原 (S40)、金子 (S41)、新井 (S46)、島田 (S46)、福田 (S46)、松村(幹) (S48)、後藤 (S50)、倉川 (S51)

現役: 厚木 (3年・幹事長)、立島 (3年)、柳田 (1年)

コースタイム

武蔵五日市駅 9:00＝浅間尾根登山口 9:55 (10:10)～浅間嶺 12:40 (13:15)～払沢の滝入口バス停 14:58

編集後記

明けましておめでとうございます。本年も OB・OG・現役の皆さんの山行が、楽しく安全に行われることを願っています。

今号には倉川秀明 OB の投稿「パプアニューギニア・ココダトレイル踏破」が載っています。元々は、パプアニューギニアに住んで、最高峰の Mt. Wilhelm(4,509m)に登ったことがあるというので、登頂記を書いて貰おうと思ったのですが、話をしているうちに日本軍が行軍したココダトレイルを踏破したことがあるとのことで、OB・OG の皆さん、昭和史（太平洋戦争）に興味お持ちかと思い、こちらを報告して貰うことにしました。結果、感動的な力作となり、感謝しています。Mt. Wilhelm に関心のある方もおられるかと思い、倉川 OB が撮られた写真を添付しました。立派な岩山です。



Mt. Wilhelm

今号のもう一つの目玉は、OB および現役の山行です。金子治雄 OB の報告の「笠ヶ岳・聖なる岳の記憶」は単なる山行報告ではなく、山の歴史、太郎良 OB の短歌、笠周辺の花々の写真等、迫力充分です。OB の山行では吉田稔 OB が精力的に山に登られており、今夏は先の笠ヶ岳に加えて、北岳、穂高岳にも登られています。今号では「穂高岳山行」を選ばせてもらいました。

現役の夏の合宿・北アルプス 3 山行も載っています。現役の報告で思ったのは、写真が大変素晴らしいことです。多分スマホで撮ったのですが、構図や色が良いです。若い人達の感性が伝わってきます。

さて振り返って、私事ですが、重力に逆らって山に登るのが辛くなって、昨年は尾瀬に日光キスゲの群生を見に行っただけです。これも家内に見せてやりたくて行ったのですが、登りでは家内に負けました。昨年のニッコウキスゲは 1 昨年より 3 週間ほど遅れ、私が行った時にはまだ菖蒲も咲いていました。



新雪の十勝連峰（飛行機より撮影）

秋になって、地元の川越氷川祭（山車の曳航）の写真係りも終わって、10 月後半に、紅葉と新雪の山を撮りたくて、北海道（阿寒湖・知床・層雲峡）の一人旅に出かけました。台風 21 号の影響で最初の 2 日間は吹雪、それでも後の 2 日間は晴れました。余り良い写真は撮れなかったのですが、最後に旭川から飛び立った時、左手に新雪の十勝連峰がばっちり見えました。火口からの噴煙も見え、ご褒美をもらった感がありました。

では本年の皆様の御活躍を祈念しております。

斉藤雄二（S41 年卒）記